

「住吉の語り部になりたい」 シリーズ第 1 回

料亭つたも主人・深田正雄

2011 年 4 月 10 日

紫川ストーリー

名古屋開府 400 年祭をキッカケに生粋のなごや人である「住吉の正雄ちゃん」に尾張名古屋の城下町、町衆の話をとの依頼が多くなりました。特に歴史を勉強しているわけでもなく、郷土についての造詣もなく、苦慮しております。ただ、料亭蔦茂の創業者・明治 21 年生まれの祖父深田良矩が一人の内孫「まさお」に語り続けた口伝を語り継ぎたくコラムをスタートいたします。

第一回は「紫川」をテーマにお伝えしたいと思います。昭和 23 年生まれの正雄は蔦茂の筋向いの伝光院にある白川幼稚園に入園しました。そこには紫式部のお墓・五輪の塔があり泉が湧いておりました。住吉一帯は泉に恵まれ川の源流となり、それは、紫川と呼ばれ 2 万 7 千年前頃・旧石器時代の竪三蔵遺跡、縄文時代の白川公園遺跡・紫川遺跡が流れに沿ってありました。

海拔 11・5M の台地にある料亭蔦茂には現在 3 本の井戸があり、深さ 33 尺（10M）に木曽の伏流水が豊富に流れております。開府 400 年を迎える清洲越えで町衆が住むために徳川家康に命じられた豊臣恩顧の大名は碁盤割のブロックに 25 本前後の井戸を掘り庶民の生活用水としていたようです。現在も当店ではこの井水で中庭の鯉は潑刺と育ち、生け花はいつまでも元気、調理用としても活躍しております。この 3 本の井戸も誰が掘ったかわかりませんが、きっと名古屋築城と時を同じにしておると祖父は申しておりました。

源流は蔦茂界限、標高差 4m、流域 1.5km の紫川は、住吉から西に現在の商工会議所南を流れ（白川公園遺跡）伏見通りを南下して若宮通りを西に洲崎神社の南から堀川に暗渠として現在も流れております。洲崎神社南、現在の大須 1 丁目花園町は旭廓と呼ばれ江戸時代から遊女 800 人を超える遊廓街で、大正時代に中村に移転したとのこと（祖父談）。

祖父たちは女性と遊びに行くことを紫川に行く、そして、良い連れ合いができたときは「紫川にはまる」といっておりました。おじいちゃんは随分、「はまった？」ようでございます。明治時代となり、汚水がどす黒くなり紫川がきれいになって欲しい願いを込めて白川と呼ばれるようになったとの口伝でございます。

科学館と商工会議所間の筋は江戸中期から花屋町と呼ばれ、紫川の新鮮なパワー水を基に多くの花卉商人が軒を並べ、南寺町に墓参に行く庶民の憩いの場であったようでもあります。

おじいちゃんから聞いた「二つの紫にまつわる悲しい伝説」が水問題研究所のHPに紹介されています。<http://www5.ocn.ne.jp/~suiken/dnst/murasaki/murasaki.html>

むかし、名古屋がまだ一面の林で、小さな村が点々としていた頃のある春のことです。

仕事を終えた村人が、川のほとりまでくると、山道を疲れきった様子で歩いてくる旅の女の姿がありました。

「もうし、このあたりに泉はないでしょうか。」

大木の根元からこんこん湧きでる美しい泉を指すと、旅の女は何度も喉をうるおしました。そして村人にたのんで、泉のほとりに小さな小屋を建ててもらい、大木の根元に石を積み重ねた「五輪塔」を建ててもらいました。

村人は旅の女に思い切って尋ねました。

「あなたは、いったいどこの方でございますか。」

「今まで身分をかくしてすみません。実は京都で、紫式部様というりっぱなお方にお仕えしていた越後というものでございます。式部様がお亡くなりになったので、悲しさのあまり故郷へ帰る途中でしたが、泉があまりに清らかなので、ここで式部様をおとむらいしようとお墓までお願いしたのでございます。」

村人の思ったとおり、女は都の人でした。

やがて越後は髪をおろし、尼になりました。

それから三年間、毎日お花を供えてお経を上げました。

ある日、村人が墓の前に来ると、一通の手紙がありました。

「長い間お世話になりました。三年のおつとめが終わったので、式部様のおそばに参ります。」

村人は、川下の藻にかかった越後の墨染めの衣を見つけました。そして越後のなきがらを式部の墓の傍らに埋めて、厚く葬ってやりました。

時が経ち、村人はその川を「紫川」、泉を「紫の泉」と呼ぶようになりました。江戸時代後期になると、「昔越後が身を投げて、浮いたり沈み浮いたり沈み、紫川に身を投げた、身を投げた」と唄われていました。

伝光院は、現在、名東区に移転しています。寺にあった五輪塔も一緒に移っておりまして。

以上、引用

紫川流域図

